

## 瓦礫の中の若木

日本経済新聞 二〇一一年五月十五日朝刊文化欄掲載

三月十八日のテレビの画面に、三陸のとある港町の映像がうつった。大津波におそわれて壊滅し、いちめん瓦礫の堆積する住宅地のなかを、ひとりの高齢の女性がさまよっている。行方不明になった幼い孫娘の写真をもって。

つい一週間前まで家のあったところへ来たが、建物は跡形もない。すさまじい残骸のあいだに、一本の細い若木が見つかった。ひよろりと垂直にのびているその若木は梅で、あの大津波にも根こそぎにされなかったばかりか折られもせず、厳寒のさなかに、新芽と小さな蕾さえつけているように見えた。

私は驚いた。根を張った若木はしなやかで強い。人間のつくった建物などたちまち押し流してしまふ圧倒的な大津波にも、それは耐え、なにごとくなかったように生きている。

私はその日、いま東京都庭園美術館でひらかれている「森と芸術」展の監修の仕事をしていた。図録を兼ねた著書『森と芸術』（平凡社刊）の校正をしていたのだが、テレビの映像が頭から離れず、最終ページにその若木のことを書きくわえた。だから話はずこし重なるが、ここでも触れないわけにはいかない。

梅の苗は孫娘の産まれた記念に植えられたのだという。いまはこの世にいない彼女の身がわりのようにして、若木は育っている。もしかするとその後、瓦礫のなかで花を咲かせたかもしれない。

★ 自然は強いものだ。たえず生成と破壊をくりかえして変化しつづけ、もとにもどることがない。自然界のすべては偶然で「想定外」で、名前も意味もないオブジェである。人間も本来は自然だった。それなのに自然を「想定」して制御し、支配しようとしている。

今回の震災でわかったのは、そんな目論見が通用しないということである。人間はもういちど自然である自分を考えたほうがいい。瓦礫のなかで芽を出した若木に、あえて希望という意味を見いだすのだとしても、それは自分を自然として捉えなおしてからだろう。

「森と芸術」という展覧会を構想する際にまず思いうかんだのは、「楽園」への郷愁ということだった。失われた楽園の神話は世界のどこにでもあり、旧約聖書のエデンの園もその一例である。西欧の絵画に見るように、楽園はしばしば森として描かれてきた。かつて長いあいだ森でくらしていた人間が、禁断の木の実を食べべて「分別」を知ったために森を追われ、農耕をいとなみ、やがて都市を築くようになったのが「文明」のはじまりである。

文明はその起源からしても森と、つまり自然と対立するものだった。人間は森を焼きはらって農地をひらき、木を伐って都市の建材や燃料を得、道具や機械や武器をつくった。そればかりかあらゆる口実のもとに森を「開発」し、いまも年々、地球上の森の面積を大幅に減少させている。

森ばかりではなく自然の全般について、文明のくりかえしてきたことがこれである。保護の観点も早くからあったが、実際には自然を制御して支配下に置くという意図をもつかぎり、文明は自然と対立しつづけるしかない。

★ 芸術はそのことを知っていた。森が人間の遠い故郷であること、魅惑と恐怖の源であり、それゆえに聖なる領域であることを、多くの作品が表現してきた。森には神々や妖精たちや怪物たちや、それに文明人とはちがう「野生人」（この言葉の語源はラテン語で森の人の意だ）が住み、もうひとつの世界を生きていることも、古来の芸術の好んで描くところだった。

旧約聖書よりもはるかに古いメソポタミアのギルガメシュ叙事詩から、現代に「野生の目」をふたたび獲得しようとするシュルレアリスムまで、森はいつも文明と対立する自然の拠点として、不可欠のモチーフになつてきた。

「森と芸術」展ではその見地から、国内にある作品を二〇〇点ほど集めている。森への郷愁をふくむ神話画や風景画ももちろんだが、自然を象徴として回復しようとしたオール・ヌーヴォーのガラス器や世紀末絵画、メルヘン絵本や木工玩具、「聖なる森」と呼ばれる怪物庭園の写真、シュルレアリスムの「野生」の表現から、森の芸術家として見た岡本太郎の仕事、ジブリのアニメーションの背景画にまでおよぶ多様な作品を、白金の森にあって内装にも森の雰囲気そなえた邸館の部屋部屋にならべ、森の迷路のように構成したかった。

★ そんな展覧会の準備の最中に震災を体験したせいもあるのか、私はいきおい自然の側からそれを考えてしまふ。

実際、今回の震災をひとつでいえば、「文明」のなかで「自然」があらわになった出来事である。人は水や火の力を知り、闇と空間と時間を知り、そして瓦礫のなかに育つ一本の若木を知った。

「復旧」という言葉は通用しない。自然はたえず変化し、旧に復することのないものだ。「自然との共存」という言葉もよく耳にしたが、むしろ自然にふたたび参加してゆくほうがいいだろう。もうひとつ、三月二十二日の新聞で忘れたい映像を見た。『ひよっこりひよつたん島』のモデルとして有名な三陸の蓬萊島の、震災前と震災後とを撮った二枚の写真である。

この小さな島には大小ふたつの丘があり、だからひよつたんの形に見えるのだが、ここも津波に吞まれ、小さい丘に建っていた灯台はひとつたまりもなく倒壊した。

だが大きいほうの丘を覆う樹々は、びくともしていない。これにも驚いた。

私たちの「文明」はさまざまの意味で、「自然」と再会したものである。

巖谷 國士（仏文学者、美術評論家）